

帯広病院 21-4111
 柳町医院 30-3111
 白樺医院 38-3500
 ケアセンター白樺 41-1165

十勝勤医協
 友の会ニュース

医療法人 十勝勤労者医療協会
 帯広市西9条南11丁目1番地
 0155-21-4718
 発行責任者 今野 光昭
 URL: http://www.tokachi-kin-ikyo.or.jp
 E-mail: soshiki@tokachi-kin-ikyo.or.jp

地域との架け橋に 地域医療連携室の取り組み

2011年度から帯広病院に開設された地域医療連携室は、他の医療機関や施設・事業所、地域との連携の窓口として活動しています。

昨年度は他病院から転院依頼があった際の対応が主な活動でした。しかし、無料低額診療の拡が

「帰りたいたい！」に応える “退院調整”始めました

これまでの、病棟看護師が患者さん、家族と相談しながら在宅サービス調整や施設入所手続の手伝いなどを行ってきましたが、現場だけで対応することが困難となりました。

そこで、今年度から病棟事務兼務の相談員と地域医療連携室が、病棟看護師と協力して行う「退院調整」を始めました。介入できたケースはまだ少ないのですが、患者さん、家族と面談して要望や生活背景を知り、必要な情報を提供し、方向性を定めていくことの大切さと難しさを実感しています。

このような状況の中で出会ったAさんの事例を紹介します。他病院からの紹介で入院したAさんは、自宅に帰りたい気持ち強くそれを阻止され

りや「貧困と格差」のある社会背景などから、病状の深刻さだけでは多くの困難を抱えたケースが少なくなく、医療だけで解決できない問題も増えてきました。

患者さん1人では意思決定ができないのに身寄りがない、家族・親戚と疎遠で何十年も音信不通、患者さんを支える家族自身が必要介護の状態、経済困難もあるといったケースが非常に多くなっています。患者さんにとって、どこでどのように生活することが最善なのかを悩み、迷う場面もあります。

と怒ったり暴れることもありました。家族のいないAさんは病状からいっても退院は難しく、孤独死の危険さえあります。本人の思いを叶えるためには、「帰りたいたい」と思ったときにすぐに外泊してもらおうとしかないと

決断。自宅に帰った際には毎日誰かが訪問する、外泊の行き帰りは送迎で対応、自宅で体調不良となったときの対応方法などをカンファレンスで決定。主治医、病棟、外来、訪問看護、居宅ケアマネ、地域包括、地域医療連携



地域医療連携会議の様子

室、行政が速やかに連絡を取り合うためのフローチャートを作って臨みました。地域友の会に必要な時の協力を依頼したところ、快く引き受けていただきました。さらに入院中にもかかわらず、配食サービスが特例で利用できることとなり、Aさんは述べ6泊を自宅で過ごすことができました。

食べたいものを食べ、やりたいことをやり、自分のペースで生活することは、誰もが望むことです。病気で残りの日々が少なかったとしたら、余計にその思いは強いことでしょう。直接的な関わりは少ないのですが、地域医療連携を通してAさんの支えになれたことを嬉しく思いました。

帯広病院には、高度急性期医療を担う病院、病床をもたない診療所、施設や在宅で療養される方などが、必要な医療からとりこぼされないように橋渡しする役割があると考えています。帯広病院がその役割を担うために、地域医療連携室の機動力と問題解決力をアップさせることが急がれる課題です。患者さんと地域から学び、必要な知識とスキルを身につけ、しっかりと「橋渡し」ができるよう努力していきます。

【帯広病院総看護師長 渡辺 景子】

聴診器

「さようなら原発集会」に十万人が参加し、全国各地で連日、集会やデモが行われている。原発ゼロの意思表示を行動で示すことは、もはや特別なことではなくなった▼人と人が同じ思いで手を繋げる感動、その力の大きさに胸をうたれる。今すぐ自分にできることとして、パブリックコメントに意見を書いた▼書きながら、今は真夏だというのに、茨木のり子の「六月」という詩の一節が浮かんだ。『どこかに美しい人と人との力はなにか 同じ時代をともに生きる』としたしきとおかしさとそうして怒りが鋭い力となって、たちあらわれる『茨木は東京タワーが完成した一九五八年にこの詩を発表した▼米政府が「原子力の平和利用」宣伝で反核世論の沈黙化をはかり、沖繩の田畑を銃剣とブルドーザーで奪い基地を拡げていった時代▼核兵器も沖繩の米軍基地もなくすことはできていないが、人と人との力によって、少なくとも戦争を起こすことだけは許していない▼茨木が「六月」で描いた、男も女も若者も満ち足りた労働と生活を送り、人と人との力で時代を進める世界は、夢の村や街のことではなくこれからの日本であると信じている。

(景子)

原水爆禁止世界大会

広島大会

8月6日、2012年原水爆禁止世界大会・広島と広島市が主催する平和記念式典に参加して来ました。各国・団体の代表者や被爆者から実際にお話を聞き、被爆者が広島で原爆を身をもって体験し、後遺障害や偏見に苦しみなながらも生き抜い



てきたこと、また、自らの体験を語り、怒りや憎しみを乗り越えて核兵器の非人道性を訴え、核兵器廃絶に尽力していることを知りました。

今も世界には2万発もの核兵器が貯蔵・配備され、人類の生存を脅かしています。核兵器を「抑止力」や「核の傘」などの名で正当化する動きや、北朝鮮問題など核兵器拡散の危険も続いています。

「核兵器のない世界」を実現するために核兵器の禁止を求める署名運動が被爆地広島・長崎からスタートしています。署名運動は世界でただ一つ原爆の被害を

体験した国民の運動としてヒロシマ・ナガサキを繰り返さないよう強く求め、全ての国の政府に核兵器全面禁止条約の交渉に踏み切るよう呼びかけるものです。核兵器で人類の生存と安全をはかることはできません。それは被爆者の声を聞いて明らかでした。広島や長崎を繰り返さない唯一の確実な手段は核兵器を廃絶することだと思えます。

これからも機会があれば核兵器廃絶の署名運動に積極的に参加し、核兵器廃絶の呼びかけを行うとともに、被爆の辛さ、悲しさ、苦しみと被爆者の平和への願いを周りに伝えていきたいと思えました。

【帯広病院事務 野口 貴弘】

ことです。このことは、ある一部の団体が行っている特殊な活動ではなく、日本全体が、「脱原発」、「原発再稼働反対」を求めていることの表れだと実感する出来事でした。私たちの住んでいる北海道にも原発があります。このままだと、いともたやすく再稼働となってしまう気がしてなりません。再稼働を絶対にさせないために、私たち一人一人の声を政府に届けることが必要だと思えました。



全国から最多の17万人

さようなら原発 10万人集会

7月16日(月)東京代々木公園にて、さようなら原発10万人集会が開かれ、全国各地からたくさんの人たちが集まりました。

集会の全体会に参加し、集会途中からは、「原発反対デモ行進」に参加しました。3コースに分かれてのデモ行進でしたが、一番印象に残っていることは参加

者の「真剣な眼差し、思い」です。「原発は必要ない、再稼働は絶対に反対だ」この一文を私も精いっぱい訴えました。

また街の人の雰囲気を知りたいと思い、デモのコースのうち新宿と原宿をめぐるそれぞれのコースに参加しました。そこで驚いたのは、集会参加者以外でも、デモに参加してくる人が無数にいた

【帯広病院事務 池田 大輔】

一部芸能人の事例を取り上げた「生活保護バッシング」がすすむなかで、多くの方が、心無い報道に傷つき、動揺されています。今後心配なのは、保護受給者や申請者への支援が断ち切られてしまうこと。そして、困っている方が、自ら申請を手控えてしまうことです。

数年前に関わった、50代男性Dさんの事例を紹介します。最初の相談は、「仕事を探したいので、母親の施設を紹介して」でした。しかし、Dさんは糖尿病の合併症で視力がどんどん落ちはじめました。就職の目途はたらず、お母さんの施設探すと、生活保護申請の支援をすすめました。

昨年5月、大所帯を2つに分割しました。「事務局を担当する人がいない」となかなか分割に足

を踏み出せずにいました。が、東西の友の会は今、地域に根ざそうと活動に力を入れています。

①世話人さんの顔が見える。②地域の特徴を活かした取り組みができる。③会員さんの様子が把握できる。などのメリットも生まれました。

札内東友の会は、地域の老人会の要請で、月1回「ふまねつと」の指導に出かけています。札内



友の会を紹介しします

シリーズ⑦
札内東 西友の会

西友の会は、健康相談会の案内を会場近くの老人会に届け、参加者が増えました。地域から孤独死や1人ぼつちをなくそうと一声かけの取り組みもスタートさせました。

世話人さんを中心に、地域との結びつきを強めようと、楽しい行事を沢山計画しています。困った時は、お互いに協力し合い、共通の財産である「ふまねつと」をサークルとして発足させ交流も深めています。

【札内東友の会 鈴木志摩子 札内西友の会 成沢せい子】

けられるなかで、過剰に自分を責めて「情けない」と感じてしまったのでした。07年北九州市で、水際作戦の「被害」をうけた50代男性は「すべて自分の責任です」と日記に記して餓死されました。現在も、孤立死、孤独死はあとを絶ちません。

私たちは、利用者さん、ご家族の支援を通じて、意図的な「バッシング」が法的、統計的にも不当なものであることを知っています。そして、その心情や苦悩の最も近くにあります。今後も、蔓延する「自己責任論」には、事例に根差した実践で対抗していきます。

医療・介護の現場から シリーズ③⑤

た。「俺、無理すれば、自分で字を書けた」「見えてない芝居をした。なさないよ」。Dさんが失明寸前なのは明らかなのですが、何度も足を運び、窓口の応答で誇りを傷つ

【指定居宅介護支援事業所 白樺所長 宮田 哲郎】

在宅生活を 続けていくために



ケアセンター白樺
作業療法士 吉野 和孝

こんにちは、ケアセンター白樺で作業療法士をしている吉野です。今回、在宅での生活を続けていくためにご紹介するのは、訪問リハビリです。あまり知られていませんが、リハビリ技士がお宅にお邪魔してリハビリをする介護保険のサービスです。どのようなことをするのか、実際の訪問の様子を含め紹介します。

訪問リハビリとは……

自宅で生活している方で、通ってのリハビリを受けることが出来ない方や自宅でのリハビリが有効な方に対して、理学療法士・作業療法士などが自宅を訪問し、運動や精神的サポートを通して在宅での生活を支えるものです。住み慣れた環境で、自分の生活スタイルに合わせて、より良い生活を送っていただくことが目的のサービスです。

どのような方が利用されているか……

介護認定をされ、主治医が必要と認めた場合に訪問リハビリを受けることができます。

- ・退院・退所直後で、自宅での生活に不安があり、引き続きリハビリを受けたい方
 - ・自宅のお風呂に入りたいが転びそうで入れない方
 - ・寝たきりの方を起こしてあげたいが、上手く起こせないご家族の方
 - ・外出したいが、玄関に段差があって出られない、道が悪く外を歩くのが不安な方
 - ・運動はしたい(してほしい)が、人が多く、時間が拘束される通いのサービスは合わないという方
- …など他にも理由は様々です。その人のニーズを尊重してリハビリを行います。

Aさんのリハビリの様子『自宅の庭を見に行く』

【Aさん 80代後半 女性 要介護度1 症状：両膝の変形、痛み】

【相談内容】 長い間1人暮らしをしていたが、両膝の痛みが悪化し、歩行困難となり入院。退院後は独居生活困難となり、グループマンションに入居。歩行の安定、体力向上を目的に訪問リハビリ開始となる。

【リハビリ内容】 1回40分 週に2回訪問

- ◎血圧、脈拍、体温、体調の確認 ◎生活の不安についての相談
- ①両膝のストレッチ ②足の筋力向上運動 ③杖での歩行練習 ④屋外への散歩

【経過】 退院時は、歩行器を使用し歩いていましたが、ふらつきがあり、見守りが必要な状態でした。まずは、足の筋肉の張りをとって膝の痛みを和らげ、膝に負担がかからないように運動し筋力をつけることから始めました。3か月ほどで、歩行器の歩行はふらつきなく安定し、ベッド周りは歩行器なしで移動できるようになりました。

杖での歩行練習も始めていたころ、Aさんは、一人暮らししていた自宅のお庭がどうなっているのか見に行きたいという目標ができました。自宅は、現在住んでいるところから大きな道路を挟んで300mほど離れたところにあり、近くには信号のない横断歩道しかなく、休めるところもありませんでした。道は段差が多く歩行器は困難、車椅子は本人が使いたがらないため、杖で行くことになりました。まずは、屋外での杖歩行の練習をして、徐々に距離をのばし、膝の痛みが出ないかを判断しながら外の環境になれるようにしました。そして、体力がついて長距離歩行が可能になり、当日は途中休憩できるように丸椅子を持って向かいました。意気揚々と一度も休むことなく自宅にたどり着き、ご家族の方が手入れをしてくれていた庭を觀賞することができました。咲いている花をひとつずつ紹介してくれ、家での思い出をつきることなく話していました。また季節が進み庭の様子が変わったら来ることを約束して帰ってきました。現在も、定期的に屋外を散歩し、歩行器なしで歩けるようリハビリをしています。

……次回も、訪問リハビリの様子を紹介します。



自宅のお庭(奥にAさんがいます)



外出レクリエーションの様子から

ケアセンター白樺デイケアらいふでは、今回初めて広小路の七夕まつりに飾りをつくって出品しました。制作期間は一ヶ月。お花紙を折ってお花を作ったり、文字の部分に貼り絵をしたり、吹き流しのスズランテープを切って縛ったりと、たくさんの方の力をお借りして、七夕まつりに合わせて取り組みました。初めてのことで、どんな飾りができるのか、きちんと完成するのか不安もありましたが、とても立派な七夕飾りが完成しました。完成した七夕飾り

デイケアらいふ 七夕まつりに参加



流しソーメンをおこないました。流しソーメンでは、ソーメンはもちろん、ずらんの畑で利用者さんが育てているミニトマトや胡瓜といった野菜や、イチゴ、ミカン、さくらんぼの果物も流しました。それぞれ流れてくる速さも違い、取る時にも上手にとれたり、中には取り損ねてしまうこともありながら、食べるだけではなく楽しみながら大きな

デイサービス 納涼 流しソーメン

デイサービスすずらんでは、四季の季節に合わせて行事を企画しており、8月9日～11日にかけて

声がかけていました。利用者さんからは、「小さいときを思い出すね」「見たことはあったけど、初めてこんな風に食べた」「楽しくて、お腹もふくれてこれは良いね」「トマトを取るの難しかったけど楽しかったね」と様々な感想が聞かれ、夏の楽しいひとときを過ぎました。

多くの方々から「また来年も楽しみだね。よろしくね」と言っていたので、来年に向けての楽しみが1つ増えました。

【デイサービスすずらん 介護主任 本田 雅和】

を一目見ようと、八月七日に外出レクリエーションを行い、七夕まつりに行きました。ケアセンター白樺と書いてある飾りを見つけてすぐに利用者さんから「ワァー!」という歓声があがりました。「すごいね、すごくきれいだね」と話をしながら、利用者さんの顔は笑顔であふれていました。「昔は七夕まつりによく孫を連れて来たんだよ」と懐かしむ方もいらっしゃいました。年に一度の夏の風物詩を、作って、見に行くと、とても楽しむことができました。来年もまた飾り作りに挑戦したいと思います。

【ケアセンター白樺デイケア 介護主任 植原 麻美】

